さとなか
ふれあい
■シルバーだより■

第18号
1994年1月1日
発行

社団法人
豊中市シルバー人材センター
豊中市北桜塚2丁目2番1号
TEL 856－1777

新春のごあいさつ

年頭に当たって

理事長　片山　喜之

新年あけましておめでとうございます。

皆様方には、お健やかに新春をお迎えのことと、心からお慶び申し上げます。

旧年中は、当センターの事業運営に格別のご理解、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

私、昨年五月酒井前理事長の後を受けて理事長に就任いたしましたが、こうして皆さまがたに年頭にご挨拶を申し上げますことを、まことに光栄に存じております。

ご存じのとおり、当シルバー人材センターは、高年齢者の自主的組織として産声をあげて以来、今日まで仕事への熱意と親切さで地域に欠くことのできない存在として、地歩を築き上げつつあり、また、順調な発展を遂げてまいりました。

これも一重に、豊中市をはじめ、関係各位の暖かいご支援・ご指導の賜ものであり、また、会員の皆様方のたゆまぬご努力によるものと、感謝申し上げます。

当センターの会員も昨年念願の千名を超え、地域に定着して参りましたが、センターの会員は、まさに社団法人の組織の一員として、「自主・自立・共働・共助」の精神のもと、自分達が永年培ってきた経験、技能、能力を「働く」ことを通じて、生きがいと地域社会に貢献していくことがシルバー人材センターの基本的理念であり、センターの存在の意義も、またここにあります。

私ども役員といたしましては、皆さまがたともどもこの理念実現のため、そして魅力あるシルバー人材センターとして発展していくため、精一杯の努力をして参りたいと存じます。

どうか、会員の皆様におかれましては、当センターのいっそうの充実発展のため、地域社会の担い手として、ご活躍くださいますようお願い申し上げます。

おわりに、皆様方におかれましては、ご健康で、よりよい年でありますように、祈念いたしまして、新年のご挨拶といたします。

新春を迎えて

豊中市長　林　實

明けましておめでとうございます。

社団法人豊中市シルバー人材センターの皆様には、お健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

平素は、市政の推進に多大のご支援、ご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

貴センターも発足以来十四年目を迎えられ、順調に発展してこられました。

市民の間に、シルバー人材センターの存在が定着して参りましたのも、ひとえに会員の方々のいままで社会で培われた豊かな実績をもとにした仕事ぶりが成果につながっているものと存じます。

発足以来の役員の方々、また、会員の皆さまがたのたゆまぬご努力の賜ものと、深く敬意を表する次第であります。

わ　国は、今や世界一の長寿国といわれ、来るべき二十一世紀には、四人に一人が高年齢者で占める超高齢社会を迎えようとしています。

このような中、千名を超える方々がシルバー人材センターに入会され、これまでの豊かな経験や能力を生かして、地域社会に貢献されておられますことは、まことに意義深いものと存じます。

今後ともいついつまでもご健康で積極的に社会参加され、活力ある地域社会づくりにお力添えを賜りますようお願いいたします。

豊中市は、市民の皆さんのご協力のお陰で、文化都　住宅都市として順調に発展を続けております。

昨今の景気の低迷で、市政運営は厳しいものがありますが、市長就任以来四年目の新春を迎えるにあたり、信念を新たにしつつ、余す任期を「いきいき豊中」の実現のため全力を傾注して参る所存でございます。

どうか皆さまがたの変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

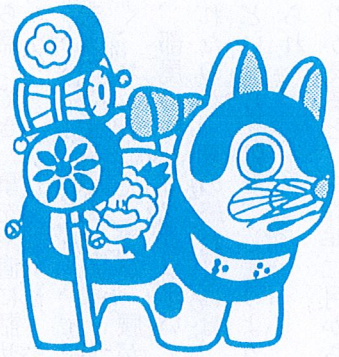
豊中市シルバー人材センターのますますのご発展と、新しい年が皆様方にとりまして素晴らしい年となりますようお祈りいたします。

あけまして おめでとう ございます

役員

理事長 片山喜之
副理事長 三河寛治
顧問 酒井千秋
専務理事 安井五郎
理事 長岡修
理事 山路政市
理事 正源義一
理事 宮崎英三郎
理事 黒岩秀子
理事 小川晋一
理事 織田照子
理事 林泰野
理事 藤田恭通
理事 佐々木信也

理事 上田善治
理事 福田勝啓
理事 中原俊彦
監事 藤井健二
監事 吉川武二郎
事務局職員一同



今年も皆様のお宅をご訪問させていただきます。

地域班役員

第一班
※西田秀雄
河嶋勝
江頭善蔵

第二班
※田中幸男
橋本勘治郎
渋谷常三郎
大森一男

第三班
※小林佶太郎
熊田潔
松原学
久保田常豊
浦欣也

第四班
※里忠夫
幡中憲吾
樋上俊次

第五班
※小原仲次郎
加藤英俊

第六班
※坊栄太郎
石田芳美
宇都宮義典

第七班
※穂崎政治郎
野尻景義
幸田朋和

第八班
津田正平

第九班
※野口高茂
岩村隆正

第十班
※宮崎三雄
山田信夫

第十一班
※小西章一
古市恒義

第十二班
※阿南和男
玉手好二郎
中内恢三
藤岡与五郎

第十三班
※山路政市
廣瀬紀
長坂浩吉
佐々木信也
山崎太美夫

第十四班
※原田幸治
柳井忠

第十五班
※前田正博
小川晋一
田中政男

第十六班
※正源義一
織田照子

第十七班
※戸牧静子
竹中由造

第十八班
※金川三郎
撫養定文

※は地域委員
その他は地域世話人

会員のひろば

（順不同）

この頃思うこと

四班　徳永美恵子

先頃、長崎に住む伯母が亡くなり、通夜、葬儀、初七日を済ませて帰宅した夜、電話が鳴った。K夫人からだった。

「ああ居てはりましたか。二三度お電話したんやけど。実は、主人が夜中に痰がからまり、苦しい言うて、救急車で市民病院に入院したんよ。本当に永い間お世話になりながら、お仕事お断りするやなんて、えらい済みませんなあ。」と、夫人は気忙しく説明された。私は驚いて、「まあ本当ですか。ご心配ですねえ。お大事になさって下さい。」と返事をした。何故か葬式から帰ってきた事を素直に話せなかった。

K夫人のご主人は七十八歳。背が高く、お元気に見えたが、腰が悪く、部屋の中をコツコツ歩いておられたのが、夏の終わりには、しんどいからと臥せてしまうようになられた。

ふりかえると、一昨年二月からシルバー人材センターで、第二の人生が始まった。仕事の内容は、人手不足の家事手伝いが主である。

初めてのお手伝いのお宅には、九十二歳のご主人がおられた。お伺いしているうちに、体調を悪くして入院された。余命があまり長くないとのことで、奥さんの寂しいご様子が感じられた。

私は病死した父を想い、元気でいてくれたら米寿の祝いの年なのにと、満足な看護もできなかった親不孝を心の中で詫びていた。

この仕事を通して思うのは、不自由な一人暮らしのご老人、高齢のご夫婦の寂しさである。私が、もし別の仕事を選んでいたら、老人問題に無関心でいたかもしれない。進展する高齢化社会。六十代の私にも、時代の波は確実に寄せてくる。現実を避けて通れない老後。厳しい生活の中で、〝思いやりの心を忘れず、やさしい気持ちで〟と考えている。

失明・胃がんを忘れる事なかれ

十三班　原田　天豊

目が覚めたら、左目が真っ暗で何も見えない。右目が下半分薄ぼんやりと見えるだけ。しまった！失明だ。体じゅうに寒気が走る。何度、目を洗っても同じこと。

病院で目隠しをされ、真暗の暮らし二十日間。日常生活全てベッドに寝たまま。実は、失明するのではとの心配は、その半年前からあったのです。ごまつぶのような黒い斑点が見えはじめ、うなぎの肝が良いと聞き、毎日食べていたらいつの間にか治ったので安心していた矢先の出来事。これからの生活を考えると、生きた気がしない。それに、にわか盲目の悲しさ。勘が全く働かない。

二ヵ月間の病院暮らし。手術、レーザー光線治療と良い先生のお陰で、目が見えるようになり退院。

しかし、その半年後に今度は胃がん。がんが二つあった。手術後の闘病生活も大変でした。「あなたは胃がんですか？　私は胃かいようです。」と胃がん病棟に入院してくる人に言われ、「私は胃がんです。」とはっきり答え、人一倍闘病に専念しました。

がん患者に、がんであることを知らすか、知らさないかとよく言われていますが、私は知らすべきだと思います。がんだということを聞いた時には、大きなショックがあるかと思いますが、その後の心構えに大きな力となります。他の患者が好き勝手な事をしても気にせず、医師や看護婦の言いつけを守り、一歩一歩健康に近づいていけます。

私の場合は食事に困りました。特に野菜がむかついて食べれないのです。無農薬の野菜を探しましたが、本物は見つからず、自分で作るしかない！と始めた〝無農薬、有機質堆肥〟の自然野菜と無人放し飼いの鶏も十三年目を迎えました。毎日、自家製の野菜、毎週一羽の鶏肉、自然卵を摂り、そのうえ毎日緑の中での屋外作業。毎週

山荘まで片道二時間の高速道路のドライブが、唯一の私の休憩時間と考えています。

昨年から娘の提案で始めた完全な無農薬の米作りも、八百キロぐらいの収穫がありました。田植えからもみすりまで、一年を通じて大変な労働でしたが、無農薬の自家製米が食べれる喜び。

完全とまではいかないが、眼鏡なしで暮らせるし、頭痛も手足の痛みもなく、足のリンパ腺の腫れや足の裏のしびれも治り、歩くのにも不自由しなくなりました。健康は自分自身で勝ち取るものだと痛感しています。健康とは本当に嬉しいものです。

週三回のシルバー人材センターの仕事には、健康のため自転車で出かけています。片道五十分かかりますが、雨の日も何のその。体を動かさないと胃の調子が思わしくなく、食欲もなくなって病人のようになります。

最近は、三度の食事以外に間食もしますが、腹八分目を心がけています。コーヒーも飲め、肉類も食べれるようになり、やっと人並みの暮らしができると喜んでおります。

第十回ベテランズ陸上競技選手権大会に参加して

六班 三宅 輝男

世界の百二十ヵ国余りが加盟、組織するマスターズ陸上競技連合を世界ベテランズと呼ぶ。二年に一度の大会で、日本では初めての歴史的な選手権である。

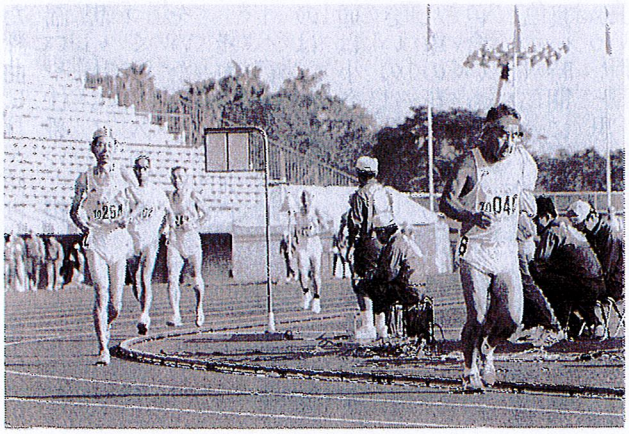
昨年十月七日から十日間、東洋一を誇る宮崎総合運動公園をメイン会場に開催された。世界的な生涯スポーツの祭典として、七十八ヵ国の選手が国際交流のもと、健康と心の豊かさを得ようと参加。女房の勧めもあって喜び勇気百倍で、私も出場を決めた。

宿舎で自分の出場クラスの名簿を眺めると、四十九名顔なじみの選手がいた。外国の有名選手も登録されている。良い成績は、とても期待できない。しかし、出場するからには、やはり勝負が脳裡から離れない。緊張のあまり睡眠もままならない。

十月十一日、朝八時試合開始のため、五時起床。約四十分ジョギングする。朝食は抜き。

招集がありスタート地点へ。だれもが慢心の体。呼吸も若々しく感じる。隣には、大男の外国選手が並んでいる。いよいよスタート。号砲と同時に自信のある選手が遠く飛び出す。トラック六周目ぐらいから、順位が大幅に変わってくる。先頭集団が追い越されていく。こちらは負けてもともと。自分のペースで、調子は悪くない。

十周目あたりから急に体が重くなり、脚が鈍る。先頭の選手は、日本記録保持者で素晴らしい走り。彼は、四十年来のライバルだ。



会場の歓声と拍手の甲斐もなく僅少の差で入賞を逸す。ゴール後は、互いにエールを送る。外国選手は腰を曲げて、大きな身振りで握手をしてくる。とても嬉しい。

他の競技場へ観戦に行く。特に目を引くのは、外国選手との体格の差。短・中距離で日本の有名選手が応援の甲斐なく惜敗する。残念だった。

夜は連日一時間にわたり、宮崎市内で仕掛花火が打ち上げられ、歓迎一色。異口同音に日本良い国と語る。各国の選手や家族から、祖国のお土産品を多くいただき、皆と記念撮影をしサインを交換する。また夜は、ホテルに招待されモテモテの夕食会。翌日は、青島海岸観光。

短期間の滞在だったが、常時私に同行してくれた通訳の方に感謝しつつ、自分ながら親善と交流が果たせたと思う。文通を期待しながらも想い出深き大会であった。しかし、世界の壁の厚さに屈した。第十一回は、一九九五年アメリカバッファローで開催予定。再開を約し別れを惜しむ。

楽しかったバスツアー
（湯郷しいたけ狩り）

四班
近藤　絢子

爽やかな初秋の九月二十八日、元気ハツラツなシルバー会員の皆様と湯郷・加西方面へのバスツアーの楽しい一日を迎えました。

しいたけ狩りでは、楢の木に沢山のしいたけが生えていたもののほとんどが小さかったので、少々残念に思いました。でも、採集することの楽しみを味わいました。

湯郷グランドホテルでの宴会では、カラオケや手品を見せていただき、また深田次長の年季の入った謡曲に耳を傾け、ふと私の父が謡いや仕舞いに親しんでいた姿を想い出していました。そして、ゆっくりと入浴を済ませてコーヒーをいただき、バスに乗りました。

それから、加西フラワーセンターへ行き、温室で特に目に映ったのは、大輪のベゴニアでした。普通は小さな花ですが、あれほど大きいのは初めて見ました。中でも八重の花は、他のものに比べて、色合いも美しく、まるでダリヤのように立派に咲き誇り、ちょうど良い時期に観賞できて、本当に良かったと思います。

ふだんは、雑草のように思っていた植物でも名が付けてあり、大切に育てられていることに考えさせられました。広い温室内を見学した後、ちょっとした疲れを癒すのに好都合な所に喫茶室が設けてあり、アイスクリームをいただいて帰路につきました。

帰りのバスではカラオケなどで賑わい、上手な方の後で、私も下手な歌を歌わせていただきました。事務局の方々のお世話に感謝しつつ、楽しい一日を存分に過ごさせていただきました。

十班
由村　武司

九月二十八日、好天に恵まれて豊中市役所前を出発。バス三台を連ねて、岡山湯郷方面へ向かう。楽しみにしていた年一回のバスツアー。参加できて本当に良かった。

バスの車内では、みかんや飲み物、お菓子が配られ、うきうき気分で話も弾む。途中休憩を取りながら、今回のツアーのメイン、しいたけ狩りの観光農園に到着。

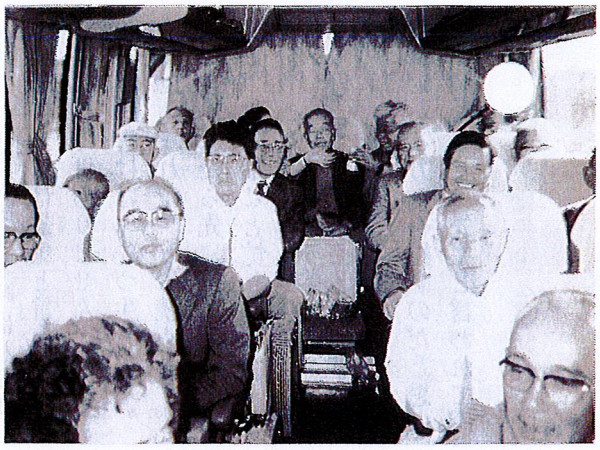
それぞれに手かごが配られ、大きなしいたけを探して移動していく。ワイワイ話しながらも、あっという間に、かごいっぱいのしいたけが採れた。全体的にやや小振りだったが、採りたてで新鮮なのが良い。

昼食は、湯郷グランドホテルの大広場でいただく。美味しい料理に酒の量も増える。大勢の方の、自慢のカラオケや手品の特技を見せていただき、大変楽しいひとときを過ごすことができた。

ホテルでゆっくりとした後は、加西のフラワーセンターへ行く。色とりどりの花が咲いており、しばしその美しさに見とれ、気持ちがなごんだ。美しく咲き誇る花だが、やはり日頃の手入れをする方々のご苦労が察せられる。あちこちで記念撮影をした後、バスに乗り込み、一路大阪を目指す。

車中では、カラオケや同乗の事務局の方々の話に盛り上がり、大いに楽しんで豊中に帰ってきました。

全員ケガもなく、無事に一日を過ごせたこと、またいろいろとお世話して下さった事務局職員の皆さんに感謝しながら、いっぱいの土産を手に家路に着いた。次回もぜひ元気に参加したいものだ。



川柳句集

三班
石川　勝

海を掬うと色が消え母が消え
靴を脱ぐ明日泣くことにした女
若い蟹たてに歩いて見たけれど
梅田まで百円少年歩き出す
足音を変えて女は母になる
鬼だったか静かに話す方だった
身の証し昨日の雲が見当らず
傘は一本夫婦の肩が濡れている
七才で訣れた母は若かった
敗戦後一年痩せた父帰る
綱渡り惜しい男が墜ちてゆく
まじめな話したくて酒を飲むのだが
悪人の遠い記憶にある絵本
太郎と花子の泉だれにも教えない
縫い戻しは絶対にない訣れだな
酒をのむ正気の沙汰の退屈さ
ゆらゆらと風に疲れた父のシャツ
紅椿ころりと母の首が落ち
それ逃げろ正直者がやってくる
マリオネットの被爆手帳がポケットに
明日を見たくて走りつづけるトンネルで
同時には着けぬ夫婦の旅である
阿呆が見上げるニュートンのリンゴの樹
不況かな痺れ薬が効いてくる
馬鹿にするなとジャガイモに花が咲く

虹が消えるぞ早くメガネを取ってくれ
不機嫌な街だなぬるいうどんだな
馬鹿でよし雲に追いつくまで走る
天下盗る道ほど遠いカタツムリ
お酒やめたら阿呆が直るのでしょうか
少年の涙は二十秒で乾く
遺書を書く紙は一枚あればよい
東西南北ひとは別れを繰り返す
妻に見せる疵は小さい方にする
十二月妻へうっかりお辞儀する
鬼ごっこの鬼につかまる十二月
蛇はおのれの長さを知らずして果てる
ジャンケンポン何を得なにを失いし
反骨の胡瓜は見事そり返る
唐辛子ひりり返せぬ恩がある
信号機ふえるこの世の怖しさ
ミスキャスト糸の吐けない蜘蛛だった
朝々の駅にサラリーマンの孵化
暑い日に熱いうどんを食う不運
仮縫いのままに終わった歳月よ
善人の顔でうどんを食べ終える
パントマイムの熱意に雲は動き出す
句読点忘れてひどい疑いを
トランペットの上手な記憶喪失者
殺がれそがれた哀しみの三日月よ
ジャンケンに負け現実に金が要る
片方の靴が見えない胸さわぎ
どなたでも良い訳でない招き猫
道幅がだんだん狭くなり嘘よ
あきらめろ雨は本気で降っている
袋から無実を叫ぶかぶと虫
なんどやっても勝てぬジャンケン
電話帳だれも偽名に気がつかぬ

〝おっちゃん〟と先生

十八班　山口　正雄

昨春、私は新緑の美しい嵐山から保津峡へとハイキングに出かけました。同行者は、男子高校生四人、大学生二人、女子短大生二人のいずれもハツラツたる若者ばかり。彼らは、チビッコ時代から絵のグループの仲間で、なかには、私の膝に乗せてお話しながら、お絵かきをした子も何人かいます。

その当時から「おっちゃん。おじちゃん」と呼ばれてきた間柄でした。それが、久しぶりで集まった今もなお、みんなから「おっちゃん。おじちゃん」と親しく声をかけられて、私はとても懐かしく、嬉しく思いました。みんな実に可愛げがあって、思わず一人一人の頭を撫でてやりたい思いになりました。

世間では、「今どきの若い者は、親と一緒に外出するのも嫌がる」と言われていますが、彼らはなんと明快なことか。学校のクラブ活動での話、修学旅行先での失敗談やアルバイトの苦労話、そして絵の話、美術論を語り合うなど、素直に大きく成長してゆく頼もしさが感じられ、どうかいつまでも、明るく天真爛漫でいて欲しいと祈るばかりです。

ところで、大阪府が毎年実施される青少年活動振興協会の〝紙芝居絵作りの講習会〟に講師として招かれ既に九年。今春は十周年を迎えます。広く一般家庭の主婦、ボランティアの男性、OL、保母さん等約六十名を対象に講習を行っています。話の献立として、せいぜい〝お子様ランチ程度の話〟を申し上げているのですが、皆さんから「先生先生」と呼ばれます。

しかし、私は先生と言われることは好きではありません。先生とは、字で書けば〝先づ生きてる〟〝先に生まれた〟とも読めます。先に生まれたら先に死ぬということで、そんなこと忙しいです。

本当に先生と呼べるのは、人の命を預かるお医者さん、子供に教育を授ける学校の教師…すなわち聖職にある方々を指すのだと思います。私などは先生と言われて固く緊張してしまうより、やはり、「おっちゃん。おじちゃん」と呼ばれて若い者達に囲まれている方が、楽しく、ざっくばらんで、のびのびとして愉快に思えます。本来は〝おじいちゃん〟でございます。

米今昔（みのり）

十一班　河嶋　勝

実りの秋といえばいろいろあるが、私のイメージは米であろうか。今年は冷夏や台風により米の作柄が戦後最悪となる恐れがあり、米の輸入も必至の情勢である。

米を主食としてきた我々にとっては無関心ではいられないことである。

米に限らず、全て物を作るということは、外部から見ていると簡単なようだが、実に大変らしい。天候に大きく左右されながらやっと実った稲が雀の大群に急襲されている様を見るにつけては、何とも言いようがない。収穫してしまうまで安心できないようだ。

昔は腰をかがめて手で植えていたのが、今は自動田植機にカセット状の苗を入れるだけで一直線上に並べられていく。これは作業の軽減にはなっているだろうが、風情がなくなりつつあるのは寂しい限りではある。一口に米の銘柄といっても最近はユニークな名前が多くなってきて私達の目を楽しませてくれているが、味がよければ銘柄なんか何でもよいというのは私だけだろうか。

また、米に限らず食物には旬というのがあって、それぞれの季節にふさわしい時期というのがある。その時期に食する新鮮な旬の味に優る食物はない。最近は生産技術が発達して、全国各地より時差出荷されている。店頭に四季の食物があふれかえっている日本は、外国の恵まれない人々の目には天国に映るかもしれない。

同好会だより

ハイキング／短歌／俳句／書道／囲碁・将棋

ハイキング同好会

健康づくりに一歩

山路　政市

一昨年十一月にハイキング同好会が発足して、早一年が経過しました。

仁川ピクニックセンターへの第一回のハイキングを行って以来、昨年十一月までに計十五回実施しましたが、回を重ねるに従い、参加者が増えており、月例会のコース選定と下見に多少の苦労がありますが、参加会員に喜んでもらえれば、その苦労も吹き飛んでしまいます。

当初の目的である「親睦と連帯意識の高揚」をいやがうえにも発揮しつつあり、月例会を通じて、体力の限界に挑戦して苦痛を乗り越えた時、その苦しみが大きな喜びに変わることがあります。

自然の四季には、それぞれの魅力があります。例えば、春には新緑の素晴らしさがあり、秋には目にしみるような紅葉があります。そして冬には樹氷の景観を楽しむことができます。山野を散策しながら、自然の景観と親しみ、自然との対話を図ることができればと願っています。

それから、また、会員の皆さんはそれぞれに健康に対する運動をされていると思いますが、足腰を丈夫にすることは、健康を維持する為にも重要なことだと感じます。

一日一万歩とまでいかなくても余暇を利用して、できるだけ歩くことに心がけましょう。

平成５年５月　京都奥嵯峨にて

御社の樹洩れ日薄く見上ぐれば
垂り枝の若葉肩にふるるも

戸牧　静子

飢えし国襤褸まといし幼子の
頬そぎし面吾を泣かしむる

中山　和久

高麗辛子あわだち草に覆われし
猪名のほとりに茅萱一株

埋み火の外の面に見せじこの想い
君に通えよ燃ゆる夢路に

江藤　翠

一瞬にあまたの命呑みし海
さざ波寄せて海猫遊ぶ

石塔を暑からむやと水で撫で
花手向くれば蟬しぐれ降る

一二三年重

千里川うす闇せまりすすき背に
魚釣る人に哀愁のあり

兄弟の相剋強く別れしも
はや年古りて盆を迎ふる

小原すゑ子

誰がための装いならむ蛇いちご
つぶらに土を色どりてあり

そのそびら淋しきかげりある人を
付添い送る街は賑ふ

見上ぐれば松葉の雨滴清やかし
茶室の外の梅雨の木洩れ日

朝倉　幸子

寝乱れの髪かきあぐる指先の
豊かな感触失せて久しく

藤本　哲夫

疲れ目に落とす一滴すがすがし
推敲終えし昴りのまま

建ち並ぶビルの吐き出す人の群れ
巷に散りて永き日暮るる

芝田　健一

潮騒を聞く夜寂しき安宿に
漂泊の二字メモに書き置く

留学の娘にも寒夜はよせ鍋を
果たせぬ思い妻と語らふ

村井實代子

アルバムの古き写真に兄二人
思い出涙語る人無し

高速船胸はずませる吾を乗せて
明石の瀬戸を波立ててゆく

本多　丘秋

薬師寺の対塔煙る梅雨の暮れ
余韻なびかす鐘に聴きいる

落葉焼く煙ただよい靄のごと
紅葉消しゆく山峡の里

短歌同好会

戸牧　静子

短歌・俳句同好会が誕生しまして、直ぐにご一緒させていただきました。それまでは、日記替わりに自己流でしたが、皆様に発表する事に赤面する一方、心の広い先輩方のご指導をうけ、皆様に助けられております。

俳句も短歌も外観は違っていても、本質的には抒情詩なので、作るうえで俳句は渋く錆、短歌は感じたまま素直に表現することに楽しみを覚えます。

短歌は、例えば晩秋、紅葉とその自然における真実の像を捉え、物如の智恵深い描写をすることで表現の本意ができると考えます。その場に足を止める内に、老後の生き方の勉強になります。三十一音字なので、二度繰り返しのリズミカルな楽しみが見えます。

美術は静寂と意味深く、音楽は情熱の狂気的と対象があり、静観、知恵、情熱造形的自然の中に、感動して何にでも歌に生かしたいと思います。自分史の懐かしい思い出となります。皆様もご参加下さいませ。

湯豆腐のうまき店はと南禅寺
紅葉山「あめゆ」の小旗黄昏(たそがれ)て
夜長酒いまも忘れぬ師の一語

人形と語り水やる菊師かな
飛驒の里寺の屋根より秋時雨
池の鯉隅に集り朝時雨

名月の雨に流れて団子喰ふ
紅葉狩り風流疲れの脚を揉む
自負したる健脚あやし紅葉狩り

長雨に今年は踏まず河童橋
華やぎし色水差に坐す老女
朝顔のこの紫が地を祓(はら)う

立冬に日のみじかさやレモン月
でで虫の旅一尺に夕茜(ゆうあかね)
人は皆樹よりも若く涅槃(ねはん)未知(みち)
一灯の淀さかのぼる夜の秋

滝川　正道

風鈴のひそかに秋の音となりし
コスモスのなよなよ風を遊ばしむ

朝倉　幸子

人生を惜しんで行くや秋の旅
紅も美(よ)し白きも清(すが)し萩の寺
旧盆(ぼん)おどり胸の谷間の汗秘めて

末広　作蔵

カラフルな雀おどしの稲穂かな
十三夜狐愁の翳(かげ)り色や濃し
送られし道は送りし能登の秋

一二三年重

萩愛(め)づる一日(ひとひ)仏にたまわりて
香にむせて十月の風金木犀
百日紅(さるすべり)天に融け入る枝の先

本多　兼重

畦道を親子そろって小春かな
つるし柿白き粉をふき年の瀬や
生家なき故郷淋し彼岸花

江藤　翠

灯を消してなほ座す窓辺夜の秋
古びたる辞書の反りくせ燈火親し
ぬきむ出て吹かれ易しや芒の穂

中山　和久

村井實代子

戸牧　静子

藤本　哲夫

小原すゑ子

俳句同好会

藤本　哲夫

平成六年の幕開け。シルバー人材センターの皆々様、明けましておめでとうございます。

俳句同好会も発足して、早や一年有四ケ月を経過致しました。その間、会員一同毎月一回例会を開催し、昨年六月には服部緑地公園において、吟行会を実施して参りました。

四季を通じて私達は、気候風土の変化、山川草木の姿等を見つめながら、五七五の調べに乗せて、その時々の感動を詠み上げる静かな一時を楽しんで参りました。気候に恵まれた時には、とかく忙しく、あわただしい生活から遁れて野山を散策し、ストレスの解消と足腰の老化防止、並びに句作に興じて頭の体操をしてボケ防止に役立てております。

俳句同好会は、このように自然を相手にした気楽な集いでございますので、各自の健康の為に、また、人の輪の広がりの為にも、皆様のご参加を心よりお待ち致しております。

ぜひ一度お越しになってみて下さい。

書道同好会

発足に寄せて

岩村　隆正

昨年八月に発起人となり、書を志す人の希望を募ったところ、二十数名の方から申し込みを受け、盛大に幕を開けたことは、喜びに堪えません。

さて、書道について私なりに気がついたことを書いてみたいと思います。

上達の早道にこれだけは知っておきましょう。

(イ) 正しい姿勢でスタート

書道に限らず、他の習い事やスポーツなどでも、姿勢の良否がその技術を習得する上で、深いつながりを持っていることは共通していますが、特に書道においては、書く人の思想や感情がそのまま線や形となって現れる精神性の高いものですから、正しい姿勢で書くことが上達のコツと言えます。

(ロ) 自己流はあとで困る

練習しやすいといって、初めに自己流の筆の持ち方や書き方を癖にしてしまうと、あとで上達はもちろん、あまり良い結果が得られません。

(ハ) 一歩後退二歩前進

学習を進めていく上での上達の秘訣は、先へ先へとあまり急ぎすぎないで、一歩後退二歩前進のつもりで精習することです。要するに、一歩一歩前進していくのですから、一度学習したところでも、よく分からなかったり、自信がない時には、あと戻りして繰り返し精習することです。

誰しも習い始めの頃は一生懸命に練習に励みますが、途中で投げ出してしまう人がよくいます。基礎をしっかり体得していない場合が多いのです。初心をいつまでも持ち続け、最後までやり抜く心構えは必要なのですが、それよりも毎日の練習をし続け、その中に楽しみや喜びを見出してコツコツ習うことです。

月に二回の練習ですが、一ヵ月より二ヵ月と積み重ね、一年後に振り返ってみた時、きっと自分の成果に満足できるよう、みんなで元気に楽しく練習に励みたいと思います。

囲碁・将棋同好会

矢野　太一

私は昨年七月に会員登録し、「事務局だより」で囲碁同好会を知って早速入会しました。

週一回の例会ですが、大変楽しく、時間の経つのを忘れてしまいます。先輩方から優しく指導を受け、メンバーの顔も覚え、友好を深める場となっております。

ただ毎回参加者が少ないのが残念です。できるだけ多くの方に参加してもらえるよう、皆さんの一番都合の良い日時に例会を開けば良いのではと思います。

そして、春と秋には囲碁大会を開催する等さらに楽しい同好会に盛り上げることができればと期待しております。

会員の皆様が、より一層多く参加されますようお待ちしております。

会員数

男性	692人
女性	365人
合計	1,057人

（平成5年12月1日現在）

あとがき

会員の皆様には、新年を穏やかにお迎えになったこととお慶び申し上げます。

本号も、皆様の投稿のお蔭で、無事編集を終えることができました。ありがとうございました。尚、誌面の都合上、掲載できなかった作品は、次号に掲載致します。

※表紙の写真は藤田理事、「迎春」は岩村会員、人物のカットは、豊中市人権文化部文化課の中村徹夫さんにご協力いただきました。

（編集委員一同）